

保育実習において学生が対応に困った経験

子どもの保健に関連した内容について

前田 はる香

Struggles for students looking after children in nursery school training
About the experiences related to “Children’s Health”

Haruka MAEDA

キーワード：子どもの保健、保育実習、困惑

I. はじめに

保育士養成機関において、保育士資格取得に必修の科目である「子どもの保健Ⅱ（演習）」は看護職者が担当する場合が多い。保育の専門職を目指す学生へ看護職者が「子どもの保健」を教授する上で対象理解を深めるため、学生が保育実習においてどのようなことで困難を感じるのか文献検索を行ったところ、保育実習や幼稚園実習における学生のストレスや困難感についての研究がいくつかあったが、子どもの保健について焦点を当てたものはなかった。

一方、すでに厚生労働省が告示し、2018年4月に施行となる新たな保育所保育指針では、「生命の保持及び情緒の安定」という養護的な働きかけや環境づくりが特に重要であることと、「養護と教育の一体性を強く意識する」ことの大切さがあらためて強調されて¹⁾おり、「生命の保持」や「健康」について科学的な根拠を持って実践する方法について学ぶ科目である「子どもの保健」が担うところは大きいと考えられる。

本稿ではこのような背景を踏まえ、保育実習において、「子どもの保健」に関係し学生が対応に困った経験について明らかにすることを目的とし、今後の「子どもの保健」に関する教育への示唆を得たいと考える。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

質問紙を用いた質的記述的研究

2. 対象者

首都圏にある保育系短期大学に在学中で、研究に同意の得られた2年生62名

3. データ収集方法

データの収集は2017年に行った。対象者に対し質問紙を用いて、今までの保育実習において対応に困った出来事のうち子どもの保健に関連した内容について自由記述にてデータを収集した。

4. 分析方法

まず記述されたデータにコードをつけコード化した。コード化したものを相違点、共通点について比較することによって分類し、類似した内容を示すコードをまとめ名前をつけカテゴリー化した。抽出したカテゴリーから本研究の目的に鑑み意味を抽出した。

5. 倫理的配慮

千葉敬愛短期大学紀要投稿規程に則り実施した。研究参加に際しては、研究目的、参加の自由、匿名性を口頭と文書で説明し、同意を得た。また、内容について相談や質問を希望する場合には応じることを説明した。

IV. 結果および考察

1. 対象者の概要

対象者は、2年制の保育系短期大学に在学中の2年生62名であり、「保育実習Ⅰ」及び、「保育実習Ⅱ」または「保育実習Ⅲ」を終えた時点でデータ収集を行った。全員が1年次に「子どもの保健Ⅰ（講義）」を履修終了しており、この時点では2年次のカリキュラムである「子どもの保健Ⅱ（演習）」を履修中であり、保健計画、身体計測、睡眠、排泄、乳児の養護的ケアなどについては学習を終え、感染症、応急処置、疾病への対応、事故防止、心身の健康問題などについては実習後に学習が予定されていた。

2. 対応に困った経験の有無

データ収集に同意の得られた62名のうち、保育実習中に子どもの保健に関連して対応に困った経験があると答えた学生は25名、ないと答えた学生は37名であった。（表1）

表1 対応に困ったことの有無	n=62
ある	25
なし	37

「子どもの保健Ⅱ」の学習内容としては、実際の保育現場に即応するような内容について学習前であったにも関わらず、対応に困ることがなかったと回答した学生が半数以上あった。厚生労働省による保育実習の実施基準では、「保育実習は、その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的」²⁾としており、対応に困ることのなかった学生はこの実習目的をよく理解し、また実習先の保育者との良好な意思疎通を基に実習がすすめられたのではないかと考えられた。

3. 対応に困った事象

対応に困ったことについて、事象別に分類すると表2の通りであり、応急手当に関することが突出して多い結果となった。保育実習を

行った時点では応急手当についての学習が終わっておらず、具体的な応急手当についての知識が不十分であったため自信をもって対応することが難しかったことなどが考えられた。（表2）

表2 対応に困った事象（複数回答あり）

応急手当	擦過傷など軽度の外傷	16
	虫刺され	1
	鼻出血	1
疾病への対応	体調不良	2
	嘔吐	2
	鼻汁	1
	下痢	1
衛生習慣	くしゃみ	1
	手洗い	1
養護	オムツ交換	1

4. 対応に困った経験

対応に困った経験について分析すると、9つのカテゴリー、18のサブカテゴリーが抽出された。（表3）以下カテゴリーは【 】内、サブカテゴリーは《 》内、記述されたデータについては「_____」で示す。

1) 【不慣れなケア】

【不慣れなケア】については、《慣れないうちの排便時のオムツ交換》に困ったと回答した学生は1名あり、「最初はウンチの取り換え方に手間取りました」と記述している。小屋が行った保育実習中の学生の乳児保育体験に関する研究では、オムツ交換について大変だったと感じた学生の割合は多く³⁾、じっとしていることのない乳児の排便時のケアは特に対応に困ったであろうことが考えられた。オムツ交換については本学内の教員間でも演習の重要性について認識されており、乳児保育担当教員と連携を取り1年次2年次それぞれで十分に演習ができるよう計画しているが、実際の様々な乳児の様子をイメージできるような演習が必要と考えられる。

2) 【応急処置が必要な場面での対応】

擦り傷など軽度の外傷や、打撲、鼻出血への応急処置が必要な場面において対応に困ったと回答した学生は非常に多かったが、自由記述での回答であったため、詳細にエピソードについ

保育実習において学生が対応に困った経験

表3

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
不慣れなケア	慣れないうちの大便時のオムツ交換	最初はウンチの取り換え方に手間取りました
応急処置が必要な場面での対応	軽度の外傷への対応	転んですり傷が出来た時 怪我をした時の対応 子どもが遊んでいた時に切ってしまい、出血した時にどうすればよいのか保育者に尋ねました ほんの少しのすり傷を見せてきた時、それくらい大丈夫と思ってもどんなに小さなケガでも絆創膏などで対処すべきだったのか困った
	打撲への対応	打撲した時
	鼻出血への対応	鼻血が出てしまった子が止まらなくて焦りました
	体調不良時の対応	具合が悪くなった時 トイレの前を通った時に男児がトイレの前で座り込んだ状態で大量の下痢便を漏らしていたこと
体調に関するアセスメント	下痢失禁への対応	鼻水が大量に出てしまった時 給食中に一人が嘔吐してしまい、先生が処理をしている間にもう一人が嘔吐してしまい、残りの子を別室に移したりするのがよく分からなく、対応しきれなかった
	鼻汁への対応	
	嘔吐時の対応	
	体調不良かどうかの判断	体調不良の判断 昼食時に食べ進みが遅い子に対して、嫌いで食べないのか体調が悪くて食べないのか判断がつかず、食べ終わるまで待ってしまった
予測困難な事故	子どもの思いがけない行動による外傷	子どもが私の足に抱きついてきて、そのままずべって顔を床にぶつけて口から血を出した
受傷した子どもの心理的動揺	傷はないが痛みを訴え啼泣	転んで傷はないけれど、痛がって泣いていた
	不要と考えられる処置の要求	絆創膏を貼るまでのケガではなかったけれど、子どもが痛いから貼って欲しいと言われた時
学習内容と保育現場での対応との相違	傷の消毒	消毒をするか
	市販薬使用の可否 吐しゃ物の処理	虫さされ、市販薬をぬっていいか 園庭で子どもが嘔吐してしまい、保育者が土をかぶせて対応していた
	感染予防行動	子どもの鼻水をティッシュで拭いた後、保育者が手洗いをしていなかったのも、実習生も手洗いしづらかった
学生が対応可能な範囲の判断	対応可能な範囲の判断	ケガをした子どもで、自分がどこまで対応したらいいか悩んだ
子どもの発達段階に応じた健康教育	くしゃみが出る時の対処	2、3歳でご飯の援助をしている時、顔の前で思いっきりくしゃみをされた。2歳だったら手で覆うことを説明しても理解できるのかな？と思った

て記述されているものは少なかった。

また、「子どもの保健Ⅱ」開講時に行った別の質問紙調査では出血などの受傷場面や嘔吐の場面について苦手であると回答した学生も多くあり、このことから軽度の外傷であっても実際の受傷場面に際し、出血や傷そのものに学生自身が動揺したことも考えられた。

3) 【体調不良時の対応】

体調不良時の対応では、『体調不良時の対応』、『下痢失禁への対応』、『鼻汁への対応』、『嘔吐時の対応』の4つのサブカテゴリーが抽出された。このうち、下痢失禁、鼻汁、嘔吐に関するコードでは「トイレの前を通った時に男児がトイレの前で座り込んだ状態で大量の下痢便を漏らしていたこと」、「鼻水が大量に出てしまっ

た時」、「給食中に一人が嘔吐してしまい、先生が処理をしている間にもう一人が嘔吐してしまい、残りの子を別室に移したりするのがよく分からなく、対応しきれなかった」とあり、いづれも保育の経験が十分にある保育者であっても対応に困ったり、労力を要したりするような場面であった。

また、「子どもの保健Ⅱ」の教授内容として「子どもの疾病とその予防及び適切な対応について具体的に学ぶ」ことが目標として定められており⁴⁾、感染症を疑うような嘔吐があった場合の具体的な対応について教授することが示されている。子どもが嘔吐した場合に速やかに他の職員と連携して対応できるようロールプレイなどのアクティブラーニングによる教授を検討すべきと考えられた。

4)【体調に関するアセスメント】

カテゴリー【体調に関するアセスメント】にはサブカテゴリー《体調不良かどうかの判断》のみが含まれ、コード「昼食時に食べ進みが遅い子に対して、嫌いで食べないのか体調が悪くて食べないのか判断がつかず、食べ終わるまで待つてしまった」からは、食がすすまない子どもに対して体調不良を念頭におきつつも注意深く子どもの様子を観察し続けた学生の様子がうかがえた。実習中に対応に困ったことを尋ねる調査で得られたデータではあるが、対応に困りつつも深く思考しながら子どもの様子を観察し、情報を得ながらアセスメントへつなげようとする姿が読みとれる。保育中の子どものフィジカルアセスメントを行う場合、子どもの様子について思考しながら注意深く観察することで体調不良を疑うことができ、そこから体温測定や触診、問診など積極的な情報収集へと結びつけ、早期の的確なアセスメントに必要な情報を多く集めることが可能と考えられる。

また、「食べ終わるまで待つてしまった」ことでアセスメントのための情報収集だけでなく、同時に非言語的に子どもを安心させたり頑張れる環境を作ったりしていたとも考えられる。

「子どもの保健Ⅱ」で教授する健康観察もまた保育現場では重要な項目の一つであり、学生

が実習中に関わった子どもの様子など具体的なイメージを引き出しながらアセスメントにつながる健康観察について考えたいと思う。

5)【予測困難な事故】

コードとしては「子どもが私の足に抱きついてきて、そのまますべて顔を床にぶつけて口から血を出したこと」が得られ、子どもの突発的で思いがけない行動により予測困難な出来事が生じたこと、また、それにより子どもが受傷し出血したことの2点について困ったのではないかと考えられた。

6)【受傷した子どもの心理的動揺】

千葉によると保育所実習における実習生のストレスの一つとして「泣いている子どもなどに対して、どのように対応したらよいか分からなかった」ことが報告されており⁵⁾、《傷はないが痛みを訴え啼泣》からは、子どもの啼泣そのもの、また、痛がっている子どもに対してどう対応してよいか分からなかったことに困ったのではないかと考えられた。

また、「痛がって泣いている」との記述からは、実際に子どもが痛いと言ったのか、観察した学生が（痛くて泣いているのだろう）と判断したのか不明であるが、少なくとも子どもが表現したことに対し深い考察を必要とする場面であったのではないかと推測される。これはもう一つのコード「絆創膏を貼るまでのケガではなかったけれど、子どもが痛いから貼って欲しいと言われた時」からも同様のことが考えられる。子どもが表現した内容をそのまま表面的に捉えるだけでなく、十分に受傷部位について観察したうえで子どもの真のニーズを捉えることが求められている。表現の未熟な子どもが本当に訴えたいことに注意を向けながら、受容的な態度で丁寧に受傷部位について観察したり、受傷の経緯について確認したりすることで子どもの表面的な要求をある程度満たしつつ、真のニーズであろう子どもの心理的動揺へのケアも同時に満たすことができるのではないかと考えられる。

このような場面での対応を考える時、落ち着いて思考すれば今まで学習した子どもへの理解

保育実習において学生が対応に困った経験

と統合させることにより学生が自ら取るべき行動を導き出せると考えられ、科目内では場面を提示しグループディスカッションなどを用いた学習により、子どものニーズを満たせるような提案が多く引き出されることが予想される。

7) 【学習内容と保育現場での対処との相違】

学習内容と保育現場での対処が異なることで学生対応に困った内容としては《傷の消毒》、《市販薬使用の可否》、《吐しゃ物の処理》、《感染予防行動》の4つのサブカテゴリーが抽出された。

《傷の消毒》、《市販薬使用の可否》については科学的または法的な根拠が明確となっているにも関わらず、保育施設間で対応が異なったり、保護者や子ども自身または保育者からのニーズと本来の対応とがかみ合わない場合があったりという背景がうかがわれる。こういった学生だけでなく保育現場でも抱える問題については、科学的根拠、法的根拠について整理しながら現場の様子も紹介し、学生間でディベートなどのアクティブラーニングを用いて討論したい。

《吐しゃ物の処理》については、場面の詳細が不明であるため、必ずしも不適切な対応とは判断できない。しかし、その対応が適切かどうか学生が見て判断できるためには、処理にかかる科学的な根拠を押さえた学習が必要であると考えられる。

一方《感染予防行動》に関係した「子どもの鼻水をティッシュで拭いた後、保育者が手洗いをしていなかったので、実習生も手洗いしづらかった」は、学習した内容を科学的な根拠とともに学生が習得した様子を示していると考えられた。対応に困った経験として挙げられたが、その感性を支持し、学生が学習した内容を実践できるようエンパワメントが必要と考えられる。

8) 【学生が対応可能な範囲の判断】

データ収集後授業内での学生とのやり取りから、実習中に子どもが応急処置を必要とする場面に学生が遭遇した場合、実際の応急処置は行わず、保育者へつなげるよう指導されていたことが分かった。学生が対応可能な範囲の判断について困ったという回答は1件であったが、

学生がとるべき具体的な行動についてイメージできなかった場合に対応可能な範囲の判断ができなかったのではないかと考えられた。

一方で「子どもが遊んでいた時に切ってしまい、出血した時にどうすればよいのか保育者に尋ねました」と記述した学生もあり、対応に困った事象に対して実習先の保育者の指導を仰ぎながら実習中に学びを得ていく様子もうかがわれた。

9) 【子どもの発達段階に応じた健康教育】

《くしゃみが出る時の対処》として「2、3歳でご飯の援助をしている時、顔の前で思いっきりくしゃみをされた。2歳だったら手で覆うことを説明しても理解できるのかな？と思った」と記述があり、学生が子どもの発達段階を考えながら健康教育について思考した様子が読み取れた。まさしく「保育実習は、その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする」につながる経験であったと考えられる。

V. 研究の限界と今後の課題

本研究では保育実習中に学生が対応に困った経験についての初期的な研究であり、質問紙による自由記述でのデータ収集を行ったため、それぞれのエピソードの詳細やその背景については明らかにすることが難しかった。今後さらに詳細について明らかにしたり、その背景について因果関係を明らかにするには半構成的面接を用いたり、因子分析が可能な質問紙を作成することなどが必要である。

VI. 結語

今回の調査により、保育実習中に学生が様々な場面で困った様子が明らかとなった。その中には、オムツ交換や応急処置、疾病とその予防など、丁寧に学習することで学生の困難感を軽減できると思われるものもあった。

また、子どもの保健Ⅱでの教授に際し、具体

的な取り組み方について示唆を得たものも多くあった。健康観察では実習で得た子どもの実際の行動や様子などを引き出すことでイメージをもって健康観察ができること、受傷した子どもに対して子どもの内面を想像し、応急処置だけでなく心理的ケアも必要とされていること、実際の場面においても科学的な根拠をもって実践することで応用可能となること、健康教育については、保育実習での統合的な学習を基にイメージを持って学習することなどが示唆された。

本研究で得られた示唆を基に、より充実した授業内容を追及していきたいと思う。

文献

- 1) 汐見稔幸：保育所保育指針ハンドブック 2017 年告示版. p .10, 学研, 2017
- 2) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長：指定保育士養成施設における保育実習の実施基準について. 雇児発第 439 号, 2001
- 3) 小屋美香：保育実習中の学生の乳児保育体験に関する研究. 育英短期大学研究紀要, 27, 33-44, 2010.
- 4) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長：指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について. 雇児発 0808 第 2 号, 2013.
- 5) 千葉弘明：保育所実習における実習生のストレス. 千葉経済大学短期大学部研究紀要, 6, 77-84, 2010.
- 6) 谷川夏美：幼稚園実習におけるリアリティ・ショックと保育に関する認識の変容. 保育学研究, 48(2) p .96-106, 2010
- 7) 西田みゆきら：小児看護実習における学生の困難感. 順天堂医療短期大学紀要 14 p .44-52, 2003